

雨乞い龍の復活と〈祭り化〉

——神奈川県清川村青龍祭を事例に——

Revival of rain-making dragon and its “festivalization”:
case study of Seiryu Festival in Susugaya,
Kiyokawa Village, Kanagawa Prefecture

天野 元喜

キーワード：雨乞い，祭り，教育事業，観光，行事の中断／復活

This study examines the process of reviving the dragon used in the rain-making ritual. Through a case study of the Seiryu Festival in Susugaya, Kiyokawa Village, Kanagawa Prefecture, it considers the intentions and history of the process. The Seiryu Festival originated with the revival of the once-discontinued rain-making ritual. Two dragons are crafted annually and carried in a procession through Kiyokawa Village on a route spanning from the elementary school to the park. In the park, strips of paper called “prayer plaques” are sold, and visitors attach them to the dragons. The dragons and the attachments are then burned because the dragons are believed to ascend to heaven where they deliver the prayers. To clarify the revival process of the Seiryū Festival, this study conducted interviews with individuals involved in the process and performed literature research. I focused particularly on explaining the dragons’ ascent and the use of prayer plaques, which were not part of the traditional rain-making ritual. The investigation revealed that the revival originated at the Yamabiko

Seminar, a local educational initiative aimed at experiencing past lifestyles and culture. The initial step was the creation of rain-making dragons. Those involved invested considerable effort, and there arose a universal sentiment to organize a festival. Originally, the dragons were set afloat on a river, but because doing so would block the river, a decision was taken to burn the dragons instead. Prayer plaques were created to allow people to make wishes reflecting contemporary concerns. The combination of these two modifications generated the understanding that the dragons ascend to heaven where they deliver people's prayers. This study presents the following conclusions. First, creating a rain-making dragon became a festival owing to the desire of those involved in the project to share with and encourage the participation of many others. Second, the impending submersion of Miyagase, a part of Kiyokawa Village, due to dam construction created a sense of crisis regarding the potential loss of lifestyles and culture. This crisis gave rise to a preservation movement aimed at transmitting those historical and cultural records. The dam construction also sparked efforts to develop Kiyokawa Village as a tourist destination. I posit that the record transmission movement led to the Yamabiko Seminar and that the tourism development movement strengthened the desire to share with and encouraged the participation of many people. In turn, that desire generated the idea of converting dragon creation into a festival, and the notion of a festival was associated with the imagery of bustling. Consequently, I propose the term "festivalization", which I define as retaining and altering elements to align with the conception of a festival, to describe the process that led to the modern Seiryū Festival.

目次

はじめに

I 先行研究の整理と問題意識

II 対象事例について

1 調査地概要

2 行事概要

3 組織概要

III 2025 年度調査報告

1 調査概要

2 龍製作の様子

3 本番の様子

4 伝承のされ方

IV 現在の青龍祭に至るプロセス

1 旧煤ヶ谷村の雨乞い龍

2 雨乞い龍の復活から青龍祭へ

3 青龍祭以後

V 意図と歴史的背景

1 青龍祭の表象

2 復活とその後の変遷の意図

3 青龍祭に至るプロセスの歴史的背景

4 雨乞い龍の〈祭り化〉

おわりに

注

参考文献

はじめに

時代の変動によって、行事は途絶えたり復活したり、新たな価値が見出され資源化されたりする。特に雨乞いは灌漑施設が充実し、産業が農業主体でなくなれば価値が見出されづらくなる。神奈川県清川村の青龍祭は、一度途絶えた雨乞い龍の製作を再現し、それを恒例行事にした事例である。なぜ一度途絶えた雨乞いを再現したのだろうか。雨乞い以外の価値が見出されたのだろうか。本稿は、青龍祭について、青龍祭開始前後のプロセスと、そのプロセスを成立させた意図や歴史的背景を明らかにすることを目的とする。

まず、「Ⅰ 先行研究の整理と問題意識」で、雨乞いを扱った先行研究と祭りの復活を扱った先行研究を整理しながら、本稿の問題意識を示す。「Ⅱ 対象事例について」で調査地と調査対象の概要を述べる。「Ⅲ 2025年調査報告」で、2025年に行った調査を踏まえ、準備と本番の様子を報告する。また、龍の製作がどのように伝承されているかを述べる。「Ⅳ 現在の青龍祭に至るプロセス」では、雨乞いが途絶えてから現在の青龍祭に至るまでのプロセスについて、聞き書き資料と文献資料を踏まえて述べる。「Ⅴ 青龍祭復活の意図と歴史的背景」では、そのプロセスと言説を成立させた意図や背景を探る。また、雨乞いから現在の青龍祭までに何が変化したかを論じる。

Ⅰ 先行研究の整理と問題意識

雨乞いについての体系的な研究は、高谷重夫の『雨乞い習俗の研究』が最も網羅的であり、基本文献としての位置を占めている。文献資料から雨乞いを通時的に研究するとともに、様々な事例を収集して分類・比較しており、古代から執筆当時に至る様々な雨乞い習俗の変遷について実証的に論じている[高谷 1982]。ただし、一度途絶えてから復活した雨乞いの事例までは扱っていない。

雨乞いを復活させた事例の研究として、八木康幸による香川県の「仁尾龍

まつり」の研究が挙げられる〔八木 1999：322-337〕。ここでは、復活の契機、復活に際して参考にされたもの、さらに復活後の活用のされかた、伝統として語られることなど、「仁尾龍まつり」の現在に至るプロセスが詳細に報告されている。八木によれば、雨乞いの龍が復活したのは1回目が瀬戸内郷土資料館の要請、2回目は瀬戸大橋博覧会'88 四国での展示、その後は地域のイベントでの展示によるものであった。さらに、地域イベントを「仁尾龍まつり」として再編し、以後「仁尾龍まつり」が恒例行事になったという。

このように、八木は、復活前後で何が起こったかについては詳細に記述している。しかし、プロセスの背後にある意図や歴史的背景については不明瞭である。なぜ瀬戸内郷土資料館が要請したのかについては、「雨乞い関連の展示に供するため、資料館が仁尾町に依頼したものではないか、といわれている」とある〔八木 1999：324〕。もちろん郷土資料館が雨乞いの展示を企画し、展示品のために雨乞い龍を製作していた自治体に要請がいくのは自然な流れである。しかし、それではなぜその後通例の行事となったのかについては、掛け声・担ぐときの身体技法などによって盛り上がったことが記述されるものの、背景にある意図については論じていない。

他に祭礼や行事の復活を論じたものは、阿南透の「高度経済成長期における都市祭礼の衰退と復活」と、川邊絢一郎の「復活」する行事―男鹿市泉台のナマハゲ」が挙げられる。阿南は青森県青森市のねぶた祭り、千葉県野田市の七夕まつり、富山県砺波市のとなみ夜高まつりを事例に、祭礼が衰退・復活（復興）した要因を考察した。祭礼にみられた変化の要因について、「伝統」としての価値が見出される「文化化」、観光客誘致を意識する「観光化」、運営組織を作る「組織化」、事故防止に努める「健全化」、興奮する若者を秩序立てて祭礼に取り込む「競技化」を挙げた〔阿南 2018：248-249〕。復活の過程で何が起きたかだけでなく、上記の要因の背景についても論じられている。たとえば、「文化化」の背景として、1975年の文化財保護法改正で無形民俗文化財の制度が作られたことなどを挙げている〔阿南 2018：248〕。しかし、阿南も個別の出来事を成立させた意図については記述が乏しい。たとえば、夜高祭りが復活したことについて、新聞記事を引用したあとは復活後の

変化を論じるのみであり、その新聞記事にも復活の要因は記されていない [阿南 2018: 241]。また、上記の4つの要因が復活に影響したとしても、いかにしてそれらの要因が夜高祭りの復活に作用したのか論じていない。

また、川邊は2018年に復活した秋田県男鹿市のナマハゲについて報告しているが、ここでは復活した要因についての記述がある。川邊は泉台のナマハゲ行事を執り仕切っている人に話を聞いた。川邊によれば、その人は泉台のナマハゲが途絶えている間、他地域のナマハゲを見ていて寂しい思いをしていた。ユネスコ無形文化遺産のリスト記載で道具が発見されたことを契機に、参加者を募り復活に至った [川邊 2019: 12]。川邊の論文では、行事を復活させた意図やユネスコ無形文化遺産への登録が契機であったことなどが記され、復活の要因が明瞭である。しかし、なぜ行事を執り仕切っていた人が他地域のナマハゲを見て寂しい思いをしていたのかなどまだ考察する余地はあると考える。

以上から、先行研究において、行事や祭礼を復活させた要因、特に意図について、十分に論じられてきたとはいえない。しかし、復活前後のプロセスの背景から分かることも多いのではないだろうか。特に雨乞いは雨を降らせるために行われる行事であるので、目的が明確な祭りである。それゆえ、雨乞いの復活は雨乞いのためか、それとも異なった目的によるものかという問いも立てられる。こうした問題意識から、神奈川県清川村で行われる「青龍祭」を事例に、雨乞いを復活させたプロセスと、そのプロセスの背後にある意図と歴史的背景を考察する。

また、八木は、観光という新たな文脈が「仁尾龍まつり」に与えた影響を論じた。新たな文脈が与えた影響は重要だと考えるが、なぜ再生後は観光が重視されたのかも重要である。青龍祭も雨乞いとしては行われず、途絶える前の雨乞いから様々な変化があった。本稿では、途絶える前の雨乞いからどのような変化があったのか、何がその変化を促したのかにも注目する。

Ⅱ 対象事例について

1 調査地概要

本章では調査地、行事、組織情報など対象の概要を述べる。まずは、本節で青龍祭が行われる清川村について確認する。

清川村は1956年に宮ヶ瀬村と煤ヶ谷村が合併して成立した〔清川村総務課1988a：107〕。2025年9月時点で総人口2,815人、1136世帯となっている¹⁾。面積71.24 km²のうち、89%とほとんどが山林である。宮ヶ瀬ダムから小鮎川が流れているが、煤ヶ谷の人家は大半が小鮎川沿いに建てられている²⁾。

また、農業は1920年代から1980年代にかけて縮小している。『清川村史』は、1930年の清川村の農業について「他の村に比べて水田や畑作が少ないので、村内または村外の学校の教員になる人が多い」と記述しつつも、「村の経済を成り立たせる産業」として位置付けている〔樋口2018：478〕。ところが、神奈川県民俗調査報告によれば、煤ヶ谷の農家数は1926年には293戸、そのうち専業農家113戸、兼業農家180戸だったが、1985年には198戸、そのうち専業農家11戸、兼業農家187戸と、専業農家が著しく減少している〔小川1988：27〕。

専業農家が減少した一方で、製茶は盛んになった。『清川村史』によれば、お茶は戦前から煤ヶ谷・宮ヶ瀬の両村で自家用として生産されていたが、1960年から1968年にかけて、需要の増加や栽培の機械化によって生産量が大幅に増加した。その過程で、自家用ではなく「足柄茶」として市場に出されるようになり、結果として「お茶は農業の一つの柱として現在でも作られている」〔樋口2018：504〕。

また、交通について、青龍祭が行われる煤ヶ谷は、厚木市と清川村宮ヶ瀬をつなぐ県道60号線が通っている。公共交通機関でアクセスする手段について、バスが本厚木駅から出ているが、鉄道の駅はない³⁾。

2 行事概要

つづいて、青龍祭について概要を述べる。

青龍祭は、清川村で8月に行われる祭りで、龍を雄・雌2匹製作し、それを村内で巡行させるものである。巡行後は公園に到着し、観客に担がせた後、最後に「昇天」と称して燃やす。会場に来た人は「祈願札」という短冊状の紙に願いを書き、龍に取り付けられる。「昇天」と祈願札について、パンフレットとホームページは「圧巻は、最後の龍の昇天の儀式（昇龍の儀）で、打ち上げる花火、青龍太鼓の演奏によって祭りの雰囲気が大きく盛り上がる中、人々の願いをこめた祈願札を体中につけた龍に点火され、豪壮に昇龍します」と同じ説明を行っている〔青龍祭実行委員会 2025〕⁴⁾。また、祈願札について、ホームページでは「青龍に願いを託すため、祈願札を当日販売いたします。家内安全、交通安全、学業成就、商売繁盛、そして願いを自由に書き込める自由札の五種類です。祭のクライマックスである昇龍儀式により願いを天に届けます」と書かれている⁵⁾。このように、龍を燃やすことを「昇天」もしくは「昇龍」と称し、それによって祈願札の願いを天に届けると説明されている。

年間スケジュールについて、準備は、1月に竹出し、2月に茅場の管理、竹割り・たが作り、6月に子どもたちと緑ことぶき連合会によるわらすぐり、茅場の管理（草刈り）、7月に茅場の管理（草刈り）、茅刈り、清川村煤ヶ谷婦人会による祈願札づくり、7月から8月にかけて青龍製作作業（胴体・頭の製作、こも編み、頭など）を行う⁶⁾。

清川村にはもともと2匹の龍を製作し小鮎川に沈める雨乞いがあったが、1929年を最後に途絶えた。青龍祭はそれを1986年に祭りとして復活させたものである。

3 組織概要

青龍祭は、青龍祭実行委員会と青龍保存会によって開催される。青龍祭実行委員会は、会場の設営など、青龍祭を開催するのに必要なことを全般的に執り仕切る。それに対して、青龍保存会は、龍の製作を専門とする組織である⁷⁾。

青龍祭実行委員会は、清川村長と清川村議会議長を顧問とし、青龍保存会に所属している A 氏を会長とする。ほかに会計、幹事、総務が割り当てられており、それらは清川村子ども連絡協議会や清川村 PTA 連絡協議会、煤ヶ谷婦人会、清川村ことぶき連合会など、清川村で活動している様々な団体の会員が務めている。青龍祭実行委員会の結成にあたっては、毎年 4 月に清川村で活動している 14 の団体に推薦依頼を出し、5 月に結成している。青龍保存会は 2023 年まで B 氏（1926 年生）が会長だった⁸⁾。しかし、B 氏が逝去してしまい、2025 年調査時は A 氏が両会長を兼任した。後述する龍の製作は、青龍祭実行委員会と青龍保存会が中心となって行うが、龍の頭は青龍保存会会員が中心となって製作した。

青龍保存会は、1986 年の 9 月 14 日に結成された [清川村総務課 1986：115]。また、清川村の広報紙に掲載されている青龍祭第 1 回の記事に、青龍祭が 9 月 14 日に行われたと記され、くわえて、「青龍祭実行委員会が主催」という記述がある [清川村役場 1988b：2]。このことから、初回から青龍祭実行委員による開催であり、さらに第 1 回青龍祭の同日に青龍保存会が結成されたと推定できる。

Ⅲ 2025 年度調査報告

1 調査概要

青龍祭の準備では、茅刈り、竹刈りを行い、その茅と竹を用いて龍を製作する。

2025 年、筆者は龍の製作の一部を見学・体験し、7 月 5 日の茅刈り、7 月 20 日の龍の胴体製作、7 月 26 日、7 月 27 日に龍の頭・胴体製作、8 月 3 日のこも編みに参加した。本章では、2025 年度の調査を踏まえて青龍祭の報告を行う。龍の製作と青龍祭本番の報告を行ったのち、龍の作り方がどのように伝達されているのか論じる。

2 龍製作の様子

本節では、龍の製作の報告を行う。なお、準備はいずれの日も午前8時から午前12時前後までの作業であった。

【7月5日 茅刈り】

ヘリポート近くの茅刈場で行われる。まず茅を刈り、それを揃えて縛りロープにかける。このとき、茅の上部を切り揃えてビニールをかける。その後しばらく茅をそのままにして干す。

【7月20日 胴体製作】

龍の胴体製作は清川村緑小学校で行われる。この日は龍の骨組みが製作された。まず、竹を円上に曲げたがを作る。たがに垂直に交差するように竹を組み、交差する部分を縄で縛る（図1）。また、もっとも頭よりのたがを超えたところをバーナーであぶって曲げ、頭部側で交差させる。

頭部に「ウエ」と書いてある部分があり、実際にそこが天井側にくるように置かれていた。しかし、途中で上になっている方を下にした方が良いのではないかという話があがり、それが認められた。そのため、天地がひっくり返され、「ウエ」と「シタ」の文字がそれぞれ横線で消されて逆になった。筆者が上と下で何が違うのか尋ねると、下の方は担ぎ棒による負荷がかかるので、強度が必要だと教えられた。実際に、もともと上だったが下に変えられた部分の方が竹の密度が大きかったように見えた。

【7月26日 こも編み】

胴体の骨組みに筋交いを加え、龍のひげを製作した。龍のひげは、針金で縄を竹に結びつけ、それをスプレーで金、銀に塗ることで作られる。金色、銀色のひげがそれぞれ2本ずつ作られた。

また、この日はこも編みを行う。こも編みとは、わらと縄を用いてすだれ状のものを作る作業である。ただし、ここでは70cm、90cm、110cm、150cmと、通常のすだれよりも大きいこもを作る（図2）。会場となる清川村緑小学

校体育館にホワイトボードがあり、そこにこもや胴体の各部材の寸法と数量、こも編みの仕方などが書かれた紙が貼られていた。この日は小学生がこも編みを行い、完成したこもを龍の腹に取り付ける（図3）。9時に小学生が集合し、A氏が、こも編みの仕方を小学生に伝える。この長さはホワイトボードに書かれた寸法によるものだが、こも製作で使うひもをあらかじめこの長さに切っておくことで、小学生がこもを編みひもを使い切れば自動的にこもが所定の大きさになるようにしてある。

こもの取り付け終了後、龍の製作の参加者に、青龍祭当日に祈願札の自由札と交換できる「祈願札無料引換券」が配布された。

【8月3日 鱗作り】

龍の角となる竹を、のこぎりで同じ長さに切りそろえる作業を手伝った。角はあとで頭に刺すので尖らせる必要がある。そのため、青龍保存会会員が竹の片端を尖らせるように切った。

また、この日は鱗作りを行う日である。鱗作りでは、茅を束ねて180度以上曲げ、根元と穂先をわらで結ぶ。見栄えをよくするため、曲がった部分を広げる。これを骨組みやこもを巻いた縄に結びつけていく（図4）。鱗作りと鱗付けは主に中学生が行う。

また鱗作りと併行して、低学年の小学生が提灯を作っていた。

鱗付けが終わった後、舌と歯が取り付けられた。舌は赤いビニールで作り、それをはりがねで上顎からつるす。歯は段ボールで下顎にのみ取り付けた。また、角になる竹を2枚束ねて結んだ。

【8月9日 頭部の完成】

校庭に入魂式の会場を示す篠竹が4本立てられていた。頭の製作の仕上げとして、ひげと角の取り付けが行われた。ひげを、上顎から180度以上反って背中の方へ伸びる形にして取り付ける。これを雄雌それぞれ2つ、合計4つ取り付けた。また、雌雄それぞれ2本ずつ角を後頭部に取り付けた。さらに、手が胴体に取り付けられた。



図1 たがで作った龍の骨格
(2025年7月20日筆者撮影)

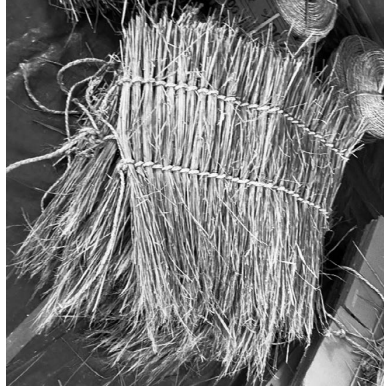


図2 こも (2025年7月26日筆者撮影)



図3 龍にこもを巻いた状態
(2025年8月3日筆者撮影)



図4 龍に鱗を付けた状態
(2025年8月3日筆者撮影)

3 本番の様子

【12時50分～13時00分 運び出し】

13時より少し前に、体育館で青龍祭実行委員と青龍保存会の会員が集まり、龍を担いで体育館から校庭に順番に運び出した。体育館の出入り口は小さく、1体ずつしか出せないなので、雄龍、雌龍の順番で出した。校庭に出した後は、入魂式の会場の前に置かれた台車に乗せた。

【13時40分～14時00分 入魂式】

入魂式では、龍の前に供物が置かれ、さらにその前に青龍祭関係者が座る。宮司⁹⁾が青龍祭関係社に採物を振り、祝詞を奏上する。そのあと、宮司が龍の前で二礼二拍手一礼をしたのち、清川村村長、清川村議会議長、衆議院議員、県議会議員、実行委員会長、保存会会長、小学校代表と小学校校長、中学校代表と中学校校長がそれぞれ龍の前で二礼二拍手一礼を行う。

【14時30分～16時20分 龍の巡行】

14時30分から小中学生が中心となって2匹の龍をかつぎ、小学校の校庭から公園の運動場まで龍を運ぶ。龍を担ぐ人の周囲には、保護者や中学生が龍から落ちたわらを回収したり、熱中症対策としてミスト噴射機でミストを担ぎ手に掛けたりする。途中、市役所の駐車場とレストラン四季で2度休憩がある。レストラン四季での休憩中、レストラン四季からジェラートが供出される。16時10分から20分までの間に2匹とも龍が公園のグラウンドに着き、ウマの上に載せられる（図7）。龍の前には賽銭箱と昇天の時に使うかがり火の台が設置される。17時から、青龍祭運営のイベントテントで祈願札の販売がされる。祈願札は、販売されてから龍が担がれるまでの間、自由に取付けられる（図8）。また、イベントテントで青龍祭のパフレットが配布される。

【18時00分～19時00分 芸能発表】

18時から1時間ほど、公園で「芸能発表」と称される催し物が行われる。地区内外の団体によるダンスや演舞などが行われる。

【19時30分 公園内での龍担ぎ】

催し物が終わった後、観客が龍を担ぎ、運動場を2周半する。このとき、運動公園に来た人なら誰でも担ぐことができ、筆者も2024年と2025年の調査で担いだ。学校のグラウンドから運動公園までの巡行では台車が使われるが、この時は台車がなくなり結構な重さとなった。

【19時50分 龍の昇天】

担ぎ終わったあと、青龍太鼓の演奏とともに龍に点火され、龍の「昇天」が行われる。龍の周辺では、ロープを持った人が龍を囲い、観客が一定以上龍から距離を取るようになる。その中で、かがり火から松明に火が移され、龍に点火された。炎が下火になったところで、花火が打ち上げられ、終了のアナウンスがされる。その後、消防隊が龍の残り火に放水する。

2023年から2025年まで参加したが、時刻については多少の変動はあるものの大きく変わることはなかった。

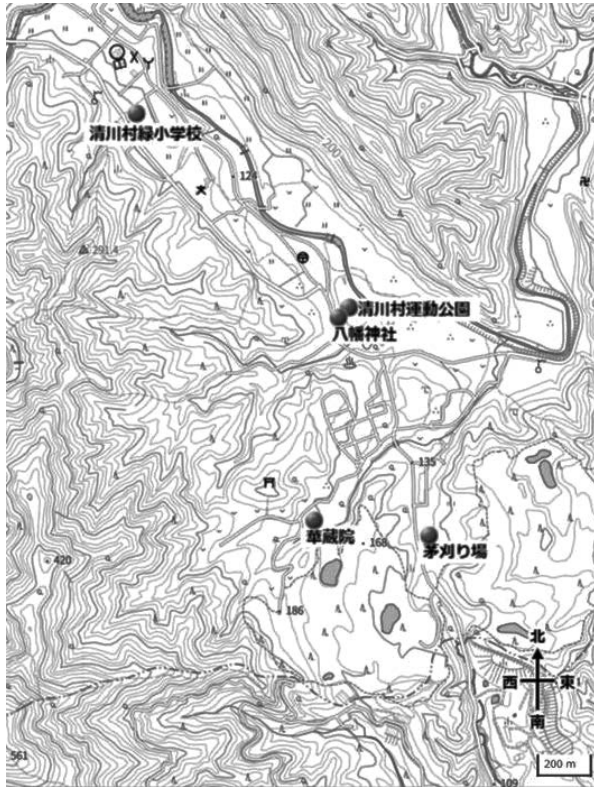


図5 青龍祭関係地図（国土地理院地形図 vector より筆者作成）
茅刈り場は青龍祭製作に使用する茅を刈る場所

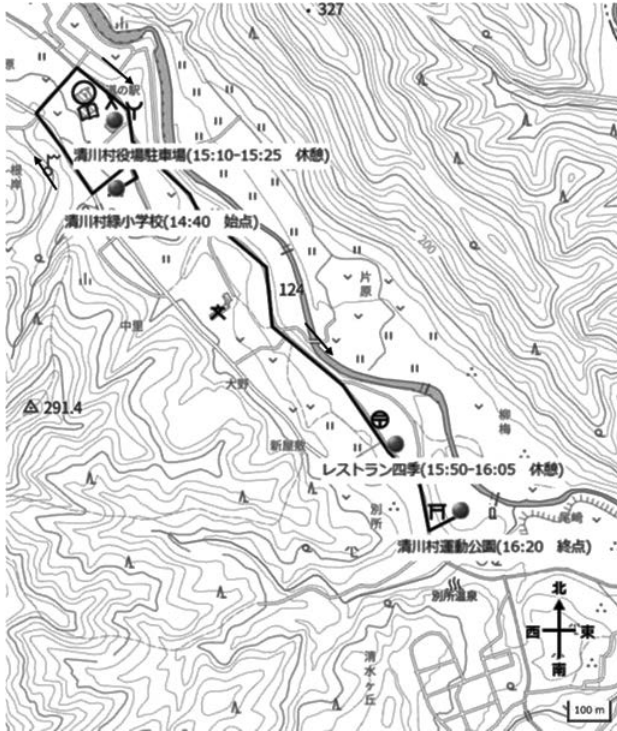


図6 青龍祭の巡行経路（国土地理院地形図 vector より筆者作成）
 黒い実線は青龍祭の巡行ルート



左 図7 運動公園に到着後、飾られた龍（2025年8月9日 筆者撮影）



右 図8 龍に祈願札が取り付けられた状態（2024年8月10日 筆者撮影）

4 伝承のされ方

龍のひげを金色・銀色に塗る際、女性の方が、こっちが金だと言って、それを金色に塗ることになった。女性に聞くと、雄の方が髭を大きいようにするが、雄は金色なので、大きい方の髭を金色に塗ると判断したという。女性は、10年前から役員で龍製作に携わっており、雄の髭の方を大きくするのは10年前から変わっていないとのことである。

2023年にも一度、準備を見学したことがあるが、当時はB氏が製作を執り仕切っていた。昨年B氏が逝去してしまい、2025年はA氏が中心となつての製作となった。青龍保存会には、会長とは別に頭の製作の中心となつていた会員が2名いた。他の青龍保存会会員は、頭の製作について不明な点があるとA氏かその2名に質問していた。その2名に聞くと、やり方はB氏の製作を見て覚えたとのことである。もともと製作に携わっていたが、2020年パラリンピックの聖火のために製作する青龍祭の龍を自分たちだけで1体作ろうと決めて、どのように作っていたか思い出しつつ試行錯誤しながら作った。これによって作り方を把握した(2025年8月9日聞き取り)。

A氏によると、体育館での龍製作でホワイトボードに掲示していた紙の原本はA氏が所持するファイルに保管されている。もともとB氏が寸法を手書きで作っていたが、A氏がそれを製図ソフトのCADでデジタル化した。ホワイトボードに掲示されている紙やファイルに保管されている紙の一部はそのデジタルデータを印刷したものである。ファイルには、B氏の手書きによるものも保管されている。また、A氏によると、2つ目の休憩場はもともと空き地だったが、レストランができて狭くなってしまったため、レストランの駐車場に入るよう龍を小さくした(2025年8月9日聞き取り)。

以上、2025年度の調査報告を行った。本章4節で確認したように、環境の変化に応じて変わった部分もあるが、それ以外は概ねB氏のやり方、もしくは従来のやり方を踏襲して行われている。

IV 現在の青龍祭に至るプロセス

1 旧煤ヶ谷村の雨乞い龍

第3章で現在の青龍祭の様子を確認した。本章では、どのようにして現在確認できるような青龍祭が成立したのかのプロセスを確認する。本節では、途絶える前の雨乞いの様子を文献資料から考察する。第2節で、雨乞いが復活したプロセスを考察する。そのために、2023年から2025年にかけて筆者が行った聞き書きで得た資料と、清川村教育委員会が発刊した『清川の伝承』を分析する。また、第3節では、第1回青龍祭開催後、どのように変遷したのかを考察する。そのために、第2節で確認した聞き書きの情報も参照しつつ、『広報きよかわ』（現『きよかわ通信』）の記述を確認する。

青龍祭の前身が雨乞いであったことことは公式のパンフレットに載っているが、神奈川県民俗調査報告でも複数箇所では報告されている。「年中行事」の章によると、麦わらによって直径2尺、体長2～2.5間の雄龍と雌龍を作る。その龍を担いで八幡神社の周りを3周したのち、鉦や太鼓を打ち鳴らし、酒を飲みながら村内を練り歩き、夕方に雄龍を「湯出川の淵」、雌龍を「寺鐘の淵」に沈める〔長田 1988：80〕。また、社会組織の章では、青年会の会員によって担がれていたとの記述がある〔山本 1988：10〕。

竹内武雄の「煤ヶ谷村の狩猟・雨乞いなど」にも、雨乞いについての記述がある。竹内は丹沢での狩猟について記した後、1929年に途絶えた煤ヶ谷の雨乞いについて、妻に聞いたことを記述している。妻は煤ヶ谷に生まれ育ち、亡父は龍を編んだという。雨乞いでは、各家の農家から麦わらを持ち寄って「男龍」「女龍」（現在青龍祭の龍は雄龍雌龍と呼ばれているが、これと同義だと考える）を2匹つくる。大きさについては長さ20間（1間＝1.8mとすると20間＝36m）太さ1抱えである。「男龍」「女龍」をそれぞれ天王社下の湯出川の川と川下の寺鐘の川へ沈める。龍は農業者がかついたり、酒樽で酒を飲んだりする。また、通行人に水をかける〔竹内 1972〕。雨乞いとしての効果については、「費用がかかるので仲々（筆者注：中々）行われなし、行

われても、雨が降らなければつちもさつちも行かぬ真際まで待つてやるので、大抵降る。隣村でも、煤ヶ谷で雨乞いしたから必ず降ると言っていたという」と記している〔竹内 1972：213〕。

清川村役場から刊行された『山彦古話』には、実際に雨乞いを体験した石川為蔵氏による話が載っている。これによれば、当時の龍は「材料の竹、むいから、縄、竜の舌にする6尺の四分板などを持ち寄り、竹で蛇籠を造り、むいからで竜のこけを作る。縄で胴を巻き、6尺の四分板を赤く塗って舌を作る。山から取ってきた真藤で竜のひげをつけてできあがり」だという〔石川 1981：167-168〕。製作した龍は華蔵院の住職によって魂が入れられ、龍にお神酒が捧げられる。若者が神社の境内を3周する。その後、「雨たまわれ、竜観音空に雲ひப்பட்ட」と言いながら龍を担いで村道を練り歩く。そして、雄龍雌龍をそれぞれ川へ沈める。「こうして川の上流と下流に納められた二頭の竜は恋しさに雨を降らし、川の増水に乗って雄竜は雌竜に会いに行く」として、雨乞いが達成される〔石川 1981：168-169〕。また、「この行事に参加した人達には、どこから水をかけてもかまわないというしきたり」があった〔石川 1981：169〕。「行事に参加した人は通行人に水をかけてもいい」と解釈すれば竹内の記述と一致するが、「この行事に参加した人に対して水をかけてもいい」とすれば齟齬が生まれる。いずれにしても、水をかけることが行われていた点は共通している。

報告書を総括すると、①わらで龍を作った、②花蔵院の住職による入魂がされた、③龍の担ぎ手もしくは、通行人に水をかけていた、④龍を担ぐ人は酒を飲む、⑤龍を担ぎ、八幡神社の周りを回った、⑤龍を練り歩くとき鉦や太鼓を鳴らした、⑥雄龍と雌龍を淵、または川に沈める、この6点は共通している。現在と比べると龍を製作し、担いで村内を巡行することと、入魂することは一致しているがそれ以外は異なっている。現在でも太鼓は叩かれるが、巡行のときではなく龍を燃やすときであり、タイミングが異なる。

龍の大きさについて、神奈川県民俗調査報告では体長5間、体2～2.5間と記述されている一方で、竹内が聞いた話では長さ20間、石川為蔵氏の記述では長さ20メートルと大きく異なる。

1929年を最後に雨乞いが途絶えたことは、どの資料でも一致している。第2章1節で確認したように、清川村の専業農家は1920年代から1980年代にかけて減少した。雨乞いが途絶えたのは、このような農業人口の減少が一因にあったと考えられる。

2 雨乞い龍の復活から青龍祭へ

それでは、いかにして雨乞いが復活したのか、聞き書き資料と文献資料から考察する。

【資料①】 聞き書き資料 話者：B氏（前青龍保存会会長、1926年生）

2023年6月25日聞き取り

B氏は農家で農業学習に関わったが、農業学習が稲作を最後までやらないことなどに反発し、PTAと対立した。それならば自分でやれということだと思うが、地域の学習を任された。そこで、昔やっていた龍をしようと思った。みんなが考えを向けてくれるものであること、お金がかからないことが理由である。龍を見に道路に出るだけでいいので、誰でも関わるができる。大人・子供・働き盛りの人も参加できる。お金がかからないのは、材料が周辺で手に入るものだからである。

父が竹細工の名人で、龍の製作にも携わっていたため、父に龍の作り方を聞いた。作り方を知るために役場の人や昔の人に話を聞いていた。

最初に龍作りを行った時は夕立が降り、雷が役場や村長の家に落ちた。それで周りの人から龍なんか作ったからだと責められた。しかし、天災であって龍作ったかは関係ないと思う。

途絶える前は龍にバケツで水をかけたらしいが、今はしていない。途絶える前は華藏院が八幡神社より立場が上だったので、魂入れは華藏院の住職が行っていた。復活後は、八幡神社に常駐していた宮司が魂入れをした。

1989年、宣伝のため、横浜博覧会に1匹だけ会場に持っていた。新型コロナウイルスによるコロナ禍で中断したため、携わる人や参加者がバ

ラバラになると思ったが、子供からも大人からもなぜ青龍祭をやらないのかよく聞かれた。病気を鎮めるための龍じゃないのかとの声もあった。病気が流行っているから仕方ないと説得した。

現在、龍は竹とわら、茅によって作る。燃やした時に有害な物質ができないようビニールなど化学物質はできるだけ材料として使わない。龍を流さないのは、川を汚さないためである。また、小さい川なので龍を流すとどこかで詰まる。

B氏によれば、青龍祭が開催されるようになったのは、地域学習で雨乞いの龍製作を再現したことが契機だった。B氏は雨乞いの龍を地域学習の題材に選んだ理由として、「みんなが考えをむけてくれる」ことと材料が周辺で手に入ることを挙げた。「みんなが考えをむけてくれる」とは、巡行の順路近くの人には外に出るだけで祭りを観覧できるため、多くの住民が関心を持てるという意味だと解釈できる。コロナ禍で参加者がバラバラになることを危惧していたことから、B氏にとって多くの人の参加が重要であったと推察できる。なお、第3章2節で茅刈りが清川村内で行われているのを確認したように、材料を周辺で調達することは現在でも変わっていない。

【資料②】聞き書き資料 話者：C氏（現清川村副村長 1984～1986年まで清川村役場に務めていた） 2024年10月8日聞き取り

1985年に「やまびこゼミナール」という教育事業で雨乞いの龍を作った。「やまびこゼミナール」は、1981年に出版された『山彦古話』を参考にしながら、地域の郷土文化を学習するものである。炭焼き小屋を作ったり、清川村七不思議の場所に行ったりした。宮ヶ瀬がダムで沈んだり、清水ヶ丘団地を作って人が移住したりしていた時期であったため、おそらく郷土文化や清川がどういう村なのかを知ってもらおうという目的があった。この時期は色々なことが動いていた転換期だった。宮ヶ瀬が沈むため、宮ヶ瀬の文化の記録や保存が盛んだった。

当時、龍は製茶工場で作っていた。製茶工場で作った龍を前日に八幡

神社まで運び、当日八幡神社で魂入れをしたのち、製茶工場まで運んだ。

1986年に雨乞いの籠を青龍祭と名付けて祭りにした。1985年の段階では、まだ太鼓を叩く、祈願札を付けるなどはしていなかった。また、籠を最後に燃やしていたが、それはこんな大きいものを川に流せない上、そのままにしておくわけにもいかないという理由だった。そのため昇天と称することもなかった。（『村政要覧』の年表を提示しながら）1986年から、祭りとしてやるために、太鼓を結成したり、祈願札をつけたり、燃やすことを昇天と称したりするようになった。青龍太鼓の結成は1987年である。教育事業を祭りにしたのは、おそらく、籠の製作が大変なので、せっかく籠を作ったのだから祭りにしようとしたのではないかと思う。

E氏という竹を裂くのが上手な人がいて、その人が竹で籠を編んでいた。E氏が逝去してからは、たがを使って竹を束ねている。

C氏は「やまびこゼミナール」で雨乞いの籠を再現したことが青龍祭のきっかけだと述べた。B氏も教育事業から始まったと述べていたので、この点は一致している。C氏によれば、「やまびこゼミナール」は『山彦古話』をもとにしている。本章1節で確認したように、『山彦古話』には旧煤ヶ谷村の雨乞いの記述がある。特に、E氏が蛇籠で作っていたことについては、『山彦古話』の記述と一致しているので、少なくとも当初蛇籠で作っていたのは同書を参考にしたものと考えられる。また、E氏逝去後は蛇籠が作れなくなったためたがで作っていた。第3章2節で確認したように2025年の籠作りもたがで作っていたことから、E氏の逝去後は籠の骨格作りにおいて大きな変化はないと推察される。

「やまびこゼミナール」を行っていた時期は、宮ヶ瀬ダムの建設や清水ヶ丘団地の開発で人が移動していた。そのため、C氏の考えでは「やまびこゼミナール」には新しく清川村に来た人に清川村について知ってもらおうという意図があった。

B氏によれば、籠を流さず燃やすのは、川に流すと詰まるからである。C

氏は、それに加えて、最初の「やまびこゼミナール」で復活させたときは龍を燃やすことを「昇天」と称していなかったと話した。C氏によれば、せっかく労力をかけて龍を作ったため、青龍祭と名付けて祭りの形にし、それに合わせて青龍太鼓の結成や祈願札の販売を行い、龍を燃やすことを「昇天」と称すようになった。

【資料③】 聞き書き資料 D氏（青龍祭復活時、社会教育主事として清川村に派遣されていた） 2025年8月4日聞き取り

青龍祭を青龍と呼ぶのは、鱗として使う茅場の茅が青々としていたため。また、飯山の白龍太鼓があったから、それに対抗をするためというのもあったかもしれない。青龍祭はもともと社会教育の「やまびこ学級」から始まる。やまびこ学級とは、子どもに清川村について知ってもらおうという活動で、清川村の地名について学習したり、旧道を歩いたりした。そうした活動の一環として、かつて清川村で行われていた雨乞いの龍を作った。

色々な人に雨乞いの龍について聞いてみたが、作り方についてほとんどわからなかった。ただ、実際に雨乞いの龍を見た人は、一様に大きかったと言った。そこで、作り方はあいまいだが、とにかく大きな龍を作ることになった。神奈川県横浜市鶴見区の蛇も蚊も祭りに視察にいたり、龍の絵などを参考にしたりしながら、蛇籠で試作品を作った。蛇籠は、E氏に蛇籠の編むのを頼んだり、竹のニクの剥がしかたを聞いた。E氏は手作りでもなんでも作れる人だった。B氏は絵心があり、同じく絵心がある人と言いつつ頭部の造形を作った。

宮ヶ瀬ダム建設の補助金で資金は手に入っていたうえ、県と村の共同事業だったので資金は十分にあった。ただ、竹・茅は村内にたくさんあり二束三文であるうえ、切らないと荒れるから切ってくれと言われるようなものである。そのため、材料費は節約しようと思い、村内の竹や茅を使うことにした。こうして、大きな龍の製作を行った。

翌年も龍を作ることになり、製茶工場で作った。製茶工場は6月

で稼働が終わるので、龍の製作に使えた。なお、現在は小学校の体育館で龍を製作しているが、製茶工場を使えなくなったのは、おそらく製茶が清川のブランドとして押し出されるようになったことと、衛生的に問題になるおそれがあることが理由である。

龍の製作をしてみると、胴体が重く、鱗作り・鱗付けが大変で、人手が欲しいとなった。そこで、社会教育で始まったこともあり、子ども会に連絡を取って協力を仰いだ。子ども会からの了承を受け、子どもに鱗作り・鱗付けをってもらうことになったが、これは以後も引き継がれた。

1年目はただ作っただけだったが、2年目の1985年はせっかく作ったのだから色んな人に見てもらいたいと思い、八幡神社の祭りで飾ることになった。八幡神社の許可がとれ、実際に飾ることができた。また、せっかく「観光立村」を打ち出しているのだから、色んな人に宣伝しようと思い、厚木の記者クラブに取材を頼んだところ、4社ぐらいから取材が来た。

日本生命財団の助成金が半分ほど残ってしまい、資金を別のことに流用したら問題なので、さらにその翌年の1986年も龍をつくることになった。また、せっかく労力を割いて龍を作るのだから、「村のお祭り」としてやっていくことに決まった。祭りだから入魂式をしたところ、大雨が降り、雷が落ちた。もちろん偶然だが、魂をいれて雨乞い竜をしたからこんなことになったとの苦情が来たことを直接ではないが聞いた。

龍を川に流せず、始末に困っていたので燃やしていた。それについて、祭りなので、燃やして龍を天に帰らせようという話になった。また、雨乞いが時代に合っていないので、雨乞いではなく村民の願いを龍に託して天に届けるかたちにし、祈願札を作るようになった。雨を降らせるよりも、受験にうまくいきたいから合格祈願をするようなことの方が時代にあっている。祈願札は紙とひもで作られており、原材料としてはほとんどただだが、資金面でも祭りに協力しているとの思いを持ってほしいと考え、祭りに使うお金を頂くために祈願札は販売形式にした。

青龍祭を開催したあと、ふるさと創生基金を受給できた。そこで、飯

山に白龍太鼓があるから、ここで青龍太鼓を作るようになった。青龍太鼓は厚木にあった楽団のドラムパーカッションの人に依頼した。初めに青龍祭のストーリーを説明し、太鼓の譜面を作ってもらった。

D氏は、青龍祭のきっかけとなった教育事業を「やまびこ学級」と呼んでいたが、内容などに共通点が多いので、「やまびこゼミナール」と同じものと考えていだろう。龍の作り方に関して、雨乞いのことを知っている人に話を聞いたことは概ねB氏・C氏の話と共通しているが、D氏の話では、それに加えて蛇も蚊も祭りなど他地域にある龍蛇の登場する祭りや龍の絵を参考にした。また、B氏は絵心があって、龍のデザインに深く関わった。

また、C氏の話では、祈願札の販売や龍を昇天と称することは青龍祭から行うようになった。D氏はそれに加えて、祈願札は雨乞いが現代の世相にあっていないから、より現代に即した祈願にしようと考えて作られたと話した。そして、祈願札と龍を燃やすことを合わせて、「龍が昇天し、願いを届ける」という新たな説明が生まれた。

【資料④】 清川村教育委員会・清川村文化保護委員会編 1987 『清川の伝承』 清川村教育委員会

昨年¹⁰⁾ 子ども会を対象に、青少年の家で宿泊体験学習を行いました。その学習課題の中に、昔の生活や伝説、伝統行事などを取入れました。その折「やまびこ古話」¹¹⁾ (老人会で発行したもの)の一部を講話の中に取入れましたが、その中に雨乞いの行事もありました。これも、今会(筆者注：今回)の龍作りのきっかけになったものであります。

今回子ども会を中心に「やまびこゼミナール」の一環事業として、雨乞いの行事を再現して、昔を偲び、この行事を通して体験教育を兼ねて、21世紀を担う心身共に健全な児童の育成に役立てる目的も含めて計画したものであります。

龍の形はできるだけ昔のものにちかいものと云うことでしたが、記録も写真等も無く、従って古老の話や他地域の視察等を行い、苦心の末予

想以上のものが出来上がりました。

大きさは、体長約 18 メートル、胴の経約 1 メートル、頭の長さ約 2 メートル、材料は真竹、わら、縄などで、総重量約 500 キログラム、製作を始めたのは 8 月 15 日、完成は 9 月 5 日、蛇籠の製作に詳しい E 氏¹²⁾を初め、B 氏のご指導のもと、子ども会、ご父兄の方々や有志の方々により、延べ人数 200 人、延べ時間 450 時間、主として夜間の作業でしたが、製作従事者の献身的な御尽力により、最初の作品としては、まあまあと言ったものが完成できました。

9 月 5 日に八幡神社祭礼地区役員の方々のお骨折りにより、製作場所の別所製茶工場から八幡神社に移して頂き、9 月 6 日八幡神社祭礼儀式の際、宮司より入魂並びにお払いを受け、同日午後児童や有志の大人たちにより神社を出発し、尾崎を経て別所お茶工場まで練り歩き、安置いたしました。

本年は丁度村勢施行 30 周年に当たります。本年を雨乞いの行事再現の発端として、今年の行事を毎年行い、清川村の年中行事の一環として定着させ、都市を追う毎に龍作りの内容に改善を加えて、これからの世相に合ったもの、つまり五穀豊穡、商売繁盛、家内安全、無病息災、学業成就、観光清川の発展に願いを込めて、村を挙げてこの青龍祭を盛大に行って参りたいと思います。[清川村教育委員会・清川村文化保護委員会 1987：44-46]

「やまびこゼミナール」で雨乞い龍を製作してから青龍祭になるまでの年代について、D 氏と『清川の伝承』に若干の齟齬がある。D 氏によると、1984 年にやまびこゼミナールで龍を製作した。1985 年にも作ったが、この年は八幡神社の祭りに出し、1986 年に龍製作が青龍祭になった。それに対して、『清川の伝承』では、1985 年、1986 年にやまびこゼミナールで龍を製作し、1986 年は製作した龍を八幡神社の祭りに出し、さらにその龍を用いて第 1 回青龍祭を開催したと記してある。最初に教育事業として龍を製作したのがいつかについては言及がない。C 氏は、出来事の年代について、たしか第 1 回青龍

祭の何年前じゃなかったかというように思い出しながら話していた。そのため、八幡神社の祭りに龍を飾った年と第一回青龍祭が別の年だと記憶違いをしまい、その結果八幡神社の祭りに龍を飾った年の前年に行った龍製作を1984年のことだと判断してしまった可能性が考えられる。いずれにしても、清川村の昔の生活などの体験学習によって龍が製作されたこと、龍が八幡神社の祭りに出され入魂が行われたこと、その後「青龍祭」と称され祭りになったという流れについては、それが何年の出来事であるかを除けば一致している。

D氏によれば、祈願札は、現代に合った祈願にしようとして始めたが、このことは『清川の伝承』の「これからの世相に合ったもの、つまり五穀豊穡、商売繁盛、家内安全、無病息災、学業成就、観光清川の発展に願いを込めて」という表現からも窺える。

3 青龍祭以後

青龍太鼓が第1回青龍祭翌年の1987年に始まったことは、『広報きよかわ』の記述と一致する。これによれば、1987年の第2回青龍祭は初めて青龍太鼓を叩いた年で、全5曲中1曲のみの演奏だった〔清川村役場総務課 1987：2-3〕。その後、1988年には4曲〔清川村役場総務課 1988b：6-7〕、1989年には青龍太鼓全曲（5曲）を披露した〔清川村役場総務課 1989：6-7〕。

また、舞台で行われる芸能発表について、『広報きよかわ』に記述されるのは、1993年の「ヤングコンサート、芸能発表などが行われる」というものが初である〔清川村役場総務課 1988：6-7〕。ただし、1988年の青龍祭は2日にわたる開催だったが、本祭の前日に盆踊りが行われると記されており、これが芸能発表の前段階だったと推定できる〔清川村役場総務課 1988：6-7〕。

以下、本章の議論をまとめる。

もともと、旧煤ヶ谷村には蛇籠で作った2匹の龍を小鮎川の淵に沈める雨乞いがあった。これは、2匹の龍が会いたいがために雨を降らせて川を増水させると説明される。しかし、旧煤ヶ谷村の雨乞いは1929年を最後に途絶えた。

1981年に老人会から出版された『山彦古話』に旧煤ヶ谷村の雨乞いの話が掲載された。また、『山彦古話』を参考にして清川の昔の生活や文化を体験する社会教育事業の「やまびこゼミナール」が実施された。「やまびこゼミナール」の一環として、一度途絶えた「雨乞いの龍」が作られた。昔の人に話を聞いたり、『山彦古話』の話を参照したり、蛇も蚊も祭りなど他地域の祭りを視察したりして、龍の作り方や造形を決めていった。龍の製作にあたっては、蛇籠が編めるE氏の協力を得て、B氏が龍の造形を考えた。

そうして龍が完成したが、川に置くと水が詰まってしまう処分に困ったので、燃やすことにした。また、龍を八幡神社の祭りに出したが、そのとき、八幡神社の宮司から龍への入魂がされた。その後、雨乞い龍の製作は青龍祭として行われるようになる。第1回青龍祭の際、雨乞いの代わりに現代の世相に合うものとして祈願札を製作した。その後、龍を燃やすようになったことと、祈願札が組み合わせあって、「龍が昇天し、願いを届ける」という説明が生まれた。

青龍祭として続けられていく中で、青龍太鼓や芸能大会が加えられた。また、E氏の逝去により蛇籠の製作が困難になったため、たがで胴体を作るようになり、現在の形に至る。

V 意図と歴史的背景

1 青龍祭の表象

第3章では、雨乞いのための龍製作が「やまびこゼミナール」という教育事業の中で再現され、その後青龍祭となったことが分かった。本章では、なぜ「やまびこゼミナール」が行われたのか、なぜ青龍祭として行うようになったのか、それぞれの意図と歴史的背景を考察する。そのために、まず本節で、青龍祭が表象されている様々なメディアを通して、青龍祭に対して誰がどのような意味づけをしているのか分析する。第2節では、本節までの内容を踏まえて、青龍祭に至るプロセスの背後にある意図を考察する。第3節で、その意図が生じた歴史的背景を考察する。第4節で、雨乞いから青龍祭

への変化を「祭り」のイメージによって論じる。

青龍祭はしばしば、清川村のシンボルとして表象されることがある。たとえば、清川村のマスコットキャラクターきよりゆんは、「清川村のお祭り「青龍祭」をモチーフにしたキャラクターです。清川村をPRするため、様々な場面で活躍しています。」と説明される。2014年に行われた清川村マスコットキャラクターの公募で選ばれたキャラクターで、現在でも清川村のホームページでマスコットキャラクターとして紹介されている¹³⁾。

茅刈りに参加した際、清川村村長からお土産をいただいたが、その中に清川チャバコがあった。清川チャバコは水に溶かすと緑茶になる粉末のスティックが入ったたばこケース状の箱で、道の駅などで販売されている。清川村ホームページに掲載されている清川チャバコを紹介するパンフレットのPDFでは、お問い合わせ先が清川村建設農林課農林係となっている。清川チャバコは第1弾と第2弾の2パッケージ出ているが、第1弾のパッケージには宮ヶ瀬クリスマスまつりのビックツリーと青龍祭の写真が使われている¹⁵⁾。また、「人により程度は異なりますが、チャバコの愛飲により清川村の人々や風景、歴史、行事等への興味が高まる可能性は否定できません。お飲みになる際は、周りの人もお誘いのうえお楽しみください」と、たばこの注意書きを模した清川村の宣伝文が記載されている。パッケージに使われた写真から、ここに書かれている「行事」は宮ヶ瀬のクリスマスと青龍祭が筆頭にあると推定される。このように、青龍祭は清川村の観光資源として扱われることがある。

青龍祭は雨乞いから祈願札へと祈願のあり方が変化したが、もともと雨乞いであったことについてもしばしば言及される。このことは、先述した青龍祭のホームページやパンフレットにも見られる。また、先述したきよりゆんの特技の欄には、「青龍の力を借りて、みんなの願いをかなえる。また雨を降らせることも」と書いてあり「みんなの願いをかなえる」と説明されるとともに、「雨を降らせる」と記述される¹⁴⁾。

小学校の副教材にも、青龍祭についての記述がある。2022年に出版された第11版の『みんなのきよかわ』の「②むかしからの行事（青龍祭）」では、以下のように記述される（ルビ省略）。

昔、「天王めいの淵」と「寺鐘の淵」に龍が住んでいて雨を降らせていたと言いつづけていました。江戸時代に日照りが続き、たくさんの方が死んだことがあります。その時、龍の話をもとに、蛇籠で龍を作って2つの淵にしずめたところ、たちまち大雨になったということです。それ以来、日照りの時にはこの「雨乞い」の行事をするようになり、昭和の初めまでつづけられていました。その後、1986年（昭和61年）に清川村発足30周年をきっかけに祭りを復活することになり、茅や竹などで大きな蛇籠を作り、それをもとに龍を作りました。また、その他に「青龍太鼓」も新しく加えられ、人びとの健康と安全、豊作を願って祭りはつづけられるようになりました。[清川村小学校社会化副読本改訂委員会 2022：88]

目次を確認すると、「②むかしからの行事（青龍祭）」は第3学年の「2わたしたちの村のようす」—「5.かわってきた人びとのくらし」—「(5)むかしからつたわるもの」の中に配置されている[清川村小学校社会化副読本改訂委員会：1994]。

「淵」が「淵」に改められるなど、細かい表現や掲載されている写真は改訂されている。しかし、内容については、清川村図書館で閲覧できるものうち最も古い第4版から概ね変化がみられない。唯一内容が変化している箇所として、第11版が復活以前の雨乞いは「蛇籠」、復活後は「籠」で作っているのに対し、第4版では復活後も「蛇籠」で作っていると記してある。第3章2節で確認したように、復活当初はE氏の技術によって蛇籠を作っていたが、E氏が逝去した後はたがで作るようになった。『みんなの清川』の記述の変化は、そのことを反映したものだと思われる。

青龍祭の位置付けも大きく変わっておらず、第4版も第11版も「変わってきた人びとのくらし」（ただし第4版は「昔から伝わるもの」と漢字表記にルビが振られている）に青龍祭が掲載されている。ここでは、昔の農具・生活道具やレコードからCDまでの変遷、昔の清川村の写真、伝説など、清川村の過去と変遷を知るための教材が載っており、青龍祭はそこに位置付けられ

ている。内容の半分近くが雨乞いについての記述であることから、青龍祭を清川村の過去を知るための教材か、少なくとも過去と現在をつなぐものとして扱っていることがわかる。

その他、青龍祭に対する説明の中で様々な意味付けがなされる。青龍祭の当日、受け付けのイベントテントで配布されるパンフレットでは、以下のような青龍祭の意味付けがされている。

この行事は、清川村の誇りとして、伝統文化を再現・継承し、観光立村に寄与するとともに住民の相互のふれあいを深めて、地域福祉の向上と青少年の健全育成にもつながるものと信じております。これからも、社会の急激な変化に惑わされず、清川村の伝統行事として、後世までも伝えてまいりたいと念願するものです。[清川村実行委員会 2025]

ここでは「伝統文化を再現・継承」「観光立村」「住民の相互のふれあいを深める」「地域福祉の向上と青少年の健全育成」が意義として提示されている。同様の意味付けは他でもみられる。青龍祭は2017年度文化遺産総合活用推進事業（地域文化遺産活性化事業）に採択された¹⁶⁾。これは文化庁による、「各地域の実情に応じた特色ある総合的な取組に対して補助金を交付することで、文化振興とともに地域活性化を推進することを目的」とした事業である。補助事業者には「地域活性化に資する特色ある総合的な取組に関する計画」の策定と提出を義務づけている¹⁷⁾。2017年の青龍祭について、同事業の実施計画が文化庁で公開されているが、「実施事業の概要」と「その他計画実施により想定される効果」は以下のように意味付けられている。

実施事業の概要

事業名は青龍祭（せいりゅうさい）。江戸時代天保の頃から昭和初期にかけて煤ヶ谷地区で行われた雨乞いの事業（雄龍・雌龍）を清川村の伝統文化（青龍祭）として再現・継承し、観光立村に寄与するとともに、住民相互のふれあいを深めて、地域福祉の向上と青少年健全育成を図るた

め、青龍祭を実施する。実施にあたり、事業期間は平成 29 年 4 月から平成 30 年 3 月までに主に実行委員会会議、龍の製作作業、龍の材料となる茅などの製作作業等年間を通して行う¹⁸⁾。

その他計画実施により想定される効果

村内小中学校の児童・生徒が龍の制作に参加することで、青龍保存会を始め関係団体とのコミュニケーションを通じた住民参画の推進により、多世代間の交流が促進及び地域力の増加につながる。また、青龍祭を通して村の魅力である地域力を情報発信を「原文ママ」することで、村が進める移住定住施策等へのアプローチが推進される¹⁹⁾。

パンフレットでの来場者に向けた説明と文化庁に向けた文章のどちらも、「伝統文化を再現・継承」「観光立村」「住民の相互のふれあいを深める」「地域福祉の向上と青少年の健全育成」を意義として提示している。

また、2025 年 7 月茅刈りに参加したあと、清川村村長からパンフレットを頂いた。そこには「この伝統行事は、毎年 1 月に青龍の骨組に使う竹を切ることからはじまる。龍本体の制作や、開催当日の様々の中心となるのは、青龍保存会のメンバーだ。そこに子どもたちや婦人会などの団体が加わり、伝統を学びながら地域全体で祭りを盛り上げている」と記述されている [株式会社ばど：7]。ここでも、「伝統を学」ぶこと、様々な団体が参加し「地域全体で祭りを盛り上げている」ことが青龍祭の魅力として描かれている。

本節をまとめると、青龍祭の表象を通して、青龍祭に対していくつかの意味付けが読み取れた。まず、青龍祭は清川村のシンボルとしての役割を担っており、そこから観光資源としての側面が読み取れる。それに加えて、「伝統」「住民の相互のふれあいを深める」「地域福祉の向上と青少年の健全育成」などが意義として語られる。さらに、清川村の過去を知る教育資源としても使われている。

2 復活とその後の変遷の意図

青龍祭の開催に至るプロセスには、教育事業として行う龍の製作と、龍の製作を青龍祭にするという大きく分けて2つの動きがあった。まずは前者の背後にある意図を考察する。教育事業としての龍の製作においては、「やまびこゼミナール」にしても、その参照元となった『山彦古話』にしても、「昔の清川村」を学ぶことや後世に伝えることが、意義のひとつとしてあった。

清川村では1971年に文化財保護条例が施行されたが、この12条に文化財保護委員の設置が規定されていたため、同年文化財保護委員が発足した〔清川村総務課 1988a: 109〕。その後、教育委員会と文化財保護委員から1972年に『社寺めぐり』、1974年に『祠めぐり』、1977年に『野立ちの石像群』、1978年に『清川村の郷土史』、1982年に『清川村地名抄』、1984年に『清川村宮ヶ瀬の民具』、1985年に『清川村史年表編』（上・下）、1987年に『清川の伝承』が出版されるなど、1970年代から1980年代は文化財保護委員の調査成果が盛んに出版された。

また、『山彦古話』について、『広報きよかわ』41号に掲載された原稿募集の記事によると「老人生きがい対策事業」として『山彦古話』の編集対策会議が開かれた〔清川村役場総務課 1980: 2〕。しかし、老人福祉として行われた一方で、昔の話を将来へ残していこうとする意図もうかがえる。募集記事では、この事業を、「村内に言い伝えられている古い民話や歌、伝説並び過去の生活、風俗、習慣などを老人の方に応募していただき、これを古話集として編集し、将来に残していこうというもの」だとしている〔清川村役場総務課 1980: 2〕。また、『山彦古話』の序文にあたる「発刊によせて」でも「時代ははげしい勢いで移り変わり、自動車、テレビそして国際社会の時代となってきました。ここに集められた山彦古話も今後過去の時代を語るむかし話として読まれることはそれなりの深い意義をもつてありましよう」と記されている〔山本 1981: 1-2〕。

『山彦古話』も、老人福祉と同時に過去のことを語るものと意味付けられていた。その時代の変動に対抗するため、清川村の「文化財」を調べよう、あるいは後世に伝えようとする気運が、青龍祭以前からあったことがわかる。や

まびこゼミナールも、『山彦古話』を参照し、炭焼きや清川村の七不思議、地名などを実体験として学ぶ教育事業であった。煤ヶ谷の雨乞い龍を復活させようした背景には、清川村に昔の生活や文化を学ぼう／伝えようとする動向があったといえる。

一方で、龍の製作を青龍祭にした理由について、聞き書きからは、多くの人に見せよう／参加させようとする意図が浮かび上がってきた。例えば、B氏はみんなが考えを向けてくれるものであることなので雨乞いの龍として復活させた。また、C氏はせっかく作ったのだから色んな人に見てもらいたいと思い、八幡神社のお祭りで飾ることになったと話した。

青龍祭が生まれたのは、大きく分けて2つの意図によると考えられる。1つ目は清川村の過去のことを学ぼう／伝えようという意図であり、それによって雨乞い龍の製作を復活させた「まびこゼミナール」が行われた。2つ目は多くの人に見せよう／参加させようとする意図であり、それによって教育事業の一環だった龍の製作が青龍祭となった。

3 青龍祭に至るプロセスの歴史的背景

前節で考察した意図には、どのような歴史的背景があるのだろうか。県央福祉事務所長の大川智子による『山彦古話』の「発刊によせて」には、「将来、宮ヶ瀬ダムの建設で湖底に沈むであろう日を迎えるとき、後世に伝えることが、老人の生きがいにつながり、また貴重な内容は子孫に語り伝えられていくことでしょう」と記されている〔大川 1981：3-4〕。また、清川村老人クラブ会長の落合茂による「発刊によせて」では「過去の時代の風俗、習慣古老の物語、衣食住、農産業あるいは、伝説、小年時代（筆者注：少年）の回顧等庶民的立場で清川村特有の味のある事柄を取りまとめ記録に残すこともまた意義深いものと思います。特に宮ヶ瀬においては、十数年前より建設省による大ダム建設計画があり、近い将来湖底となり得る運命であります。雨の日、移転地において目を通すことも思い出の深いこととなります」と記されている〔落合 1981：5-6〕。ここでも、清川村の生活や文化を語り継いでいくことの意義が語られているが、それがダムにより宮ヶ瀬が沈むことと結

びつけられている。阿南は1970年代から伝統の価値が見直される「文化化」が起きたと指摘していたが〔阿南 2018：248〕、清川村の場合、そのような全国的な動向だけでなく、ダム建設という地域的な出来事も関わっているようだ。そのため、以下でダム建設について概観する。

清川村総務課が刊行した『村勢要覧資料編—昭和63年度』の巻末にある年表によれば、宮ヶ瀬ダム建設は、1969年9月に建設省が構想を発表し、翌1970年に宮ヶ瀬ダム建設計画説明会を開催した。1972年ダム対策室が設置され、同年地元ダム対策費助成が出された〔清川村総務課 1988a：109-110〕。また、神奈川新聞の『宮ヶ瀬ダム—湖底に沈んだ望郷の記録』によれば、ダム対策委員会が「宮ヶ瀬ダム対策連絡協議会」（連協）と「宮ヶ瀬ダム対策協議会」（対策協）に分裂した。水没地域の財産調べである一筆調査を前にして、連協は一筆調査を承認するしかないとし、対策協は一筆調査の前に補償基準や代替地問題を解決すべきだと主張した。そうしたなかで1975年、一筆調査が承認された。ただし、全地区での同意を取り付けないうまま始めたため、連協内部からも反発が出た〔神奈川新聞編集局 2001：20-21〕。その後、補償や水没地域に住む人の移転先について意見の交換が行われ、2000年にダムが竣工した〔樋口 2018：514-515〕。

ダム建設で失われる物事を記録する動きとして、前述の清川村文化財保護委員・清川村教育委員会による『清川村宮ヶ瀬の民具』に加え、ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会編著による『ふるさと宮ヶ瀬—溪谷の村から』が挙げられる。後者には、ダムによって水没する前の宮ヶ瀬で営まれていた生業や祭りなどの生活や文化、宮ヶ瀬の自然などについて書かれている。あとがきには以下のように記されている。

そして今、そのダム・宮ヶ瀬湖が新たな宮ヶ瀬の顔とよばれるようになった。

しかし、「待てよ」と言いたい。宮ヶ瀬はダムの恩恵によって成り立っていた村ではない。ダムイコール宮ヶ瀬ではないのだ。首都圏最大と謳われるダムの陰に隠れた長い長い歴史や文化、伝統といったものが宮ヶ

瀬にはあるのだ。

それを知ってほしい。なにより今を生きている宮ヶ瀬人の気持ちを
知ってほしい。そんな気持ちが高まって、「ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ
会」が発足し、同時に宮ヶ瀬の心を発信する手段のひとつとして、小冊
子を編もうという計画が持ちあがった。昨年12月のことだった。[落合
1997：108]

宮ヶ瀬ダムの建設が決まり説明会が行われたのが1970年であること、清川
村文化財保護委員が発足し、清川村の文化財に関する書籍が盛んに出ていた
のが1970年代から1980年代であることを併せて考えると、宮ヶ瀬の生活・
自然・文化が失われてしまうという危機感は、清川村全体で昔のことを調べ
たり語り継いだりしていこうとする動きに少なからず影響を与えていたと考
えられる。

もうひとつ、ダム建設と併行した動きとして、観光地化が見られる。1986
年9月、青龍祭が復活した月に刊行された『村制30周年記念要覧 清川風土
記』の「二十一世紀のビッグビジョン」と題したページでは、以下のような
記述がある。

ところが、昭和44年、県民への水供給のために宮ヶ瀬地区の全戸が水
没、移転となる関東地方最大の宮ヶ瀬ダム建設計画が持ちあがり、本村
開びゃく以来最大の試練を経験しました。だが、ダム建設にともない出
現する湖の周辺に施設を配置。観光立村として新たな歴史の1ページを
切り拓こうと、勇躍前進を開始したところです。[清川村総務課1986：
24]

宮ヶ瀬ダム建設を「本村開びゃく以来最大の試練」と表現しつつも、ダム
湖周辺に施設を配置したことについて「観光立村として新たな歴史の一ペ
ージを切り拓こうと、勇躍前進を開始した」と記述してある。「観光立村」とい
う言葉は同書の別の箇所でも使われており、表表紙裏の当時清川村村長によ

る文章のタイトルに「観光立村の旗を掲げて第一歩」と書かれている。本文には「観光」という言葉が使われていないが、県央テクノピア、さがみ流通基地、さがみ商圈についての記述があり、これがタイトルに対応しているものと読める。また、ここでもダム建設について記した上で、「本村は、今まさに大きく変わろうとしております」と、変動していることへの記述がある。総務課編集の資料の記述であるので、少なくともこの時期の清川村の行政には、観光地化を推進する動きがあったと見て良いだろう。

当時清川村に観光地化を目指す動きがあったことは、その他の資料からも読み取れる。たとえば、先述の「ふるさと宮ヶ瀬―溪谷の村から」は、宮ヶ瀬で開かれるクリスマスイベントによって期間中 35 万人の観光客が来るとし、「宮ヶ瀬は観光客を集めるという面では、一年を通してまずまず順調だといっているようである」と評している〔ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会 1997: 85-86〕。また、第 4 章 2 節で引用した『清川の伝承』には、五穀豊穰など複数の願いを並べた後、「観光清川の発展に願いを込めて村を挙げてこの青龍祭を盛大に行って参りたいと思います」と記してある〔清川村教育委員会・清川村文化保護委員会 1987: 6〕。さらに、『村制 30 周年記念要覧 清川風土記』は「ご・きよかわ考」と題したページで、清川村役場総務課が村民に行ったアンケート調査の結果を記述しているが、このアンケート結果でも観光地化を望むものがある。アンケートの中に「将来、どんな村になってほしいですか」という質問があるが、その回答は「観光地化を望む」「優良な企業を誘致してほしい」などの「開発指向型」と、「豊かな大自然の中で、このままの姿を守ってほしいと望む保存型」の 2 つに分かれるとした〔清川村総務課 1986: 26-28〕。

多くの人に見せようとする思いは、労力をかけて立派な物を作ったなら自然と湧く感情だろう。しかし、観光立村を掲げていた時期と青龍祭が復活の時期が一致していること、現在では清川村のシンボルとして扱われていることから、青龍祭は少なからず観光地化の影響を受けていると考えられる。

ただし第 5 章 1 節の最後で確認したように、青龍祭の意味付けには「観光立村に寄与する」というものとともに、「住民相互のふれあいを深める」とい

うものがあつた。また、B氏も、周辺住民が気軽に参加できることを重要な意義だと認識していた。このように、外から人を呼ぶだけではなく、周辺住民に関与させようとする意図もしばしばみられる。

しかし、なぜ多くの人に見せよう／参加させようとする意図が「祭り」にする動きへとつながるのだろうか。次節ではこのことについて検討する。

4 雨乞い龍の〈祭り化〉

B氏は、祈願札や青龍太鼓が「祭り」として形を整える中でできたのではないかと述べた。「祭り」として形を整えるということ、筆者は「行事の諸要素を変えたり残したりして、「祭り」のイメージに合ったものへ近づけること」と捉え、本稿ではこれを〈祭り化〉と定義する。雨乞いから青龍祭への変化を説明するうえで〈祭り化〉が有効だと考える。そのため、本節では青龍祭がいかに、そしてなぜ〈祭り化〉したか考える。

青龍祭における〈祭り化〉について考えるため、「祭り」とはどのようなものがイメージされていたのかを考える必要がある。まず、八幡神社の祭りで雨乞い龍が飾られたことから推察すると、当時の青龍祭関係者は「祭り」といわれたら八幡神社の祭りを想像するのが自然である。『社寺めぐり』によると、八幡神社では、1968年まで祭典前夜の宵宮で義太夫が行われていたが途絶え、宵宮がないと寂しいので、1971年に盆踊りを行うようになった。同書には「神社の森から賑わう太鼓のひびきはよいものである」と記されてある〔清川村教育委員会・清川村文化財保護委員会 1987: 34〕。ここでは、祭りの「賑わい」がポジティブなものとして描写される。同じく祭りの賑わいを描くものとして『広報きよかわ』の八幡神社の祭りについての記事があり、それには「本社の祭典（秋祭り）は、本祭りと宵まつりと二日にわたって繰り出され、数千人の人出で賑わっていました」と記されている〔清川村役場 1954: 3〕。また、山本は「前夜祭に幟立て。当日は煤ヶ谷の中から7つの神輿が集まり、祭式が行われる。次いで余興の芝居が行われる。芝居は例えば藤沢の「沢村劇団」などを頼んだ。祭りの翌日は午前中に幟返し、鉢洗い掃除が行われる。幟は八幡様に保管しておく」と報告している〔山本 1988:

11]。

青龍祭の、龍に入魂をし、それを多くの人で担ぐことは神輿担ぎに類似している。途絶える前の雨乞いで行っていた入魂は、教育事業として龍を製作していた時は行っていなかったが、八幡神社のお祭りに飾った時と、青龍祭として開催するようになってからは行っている。水をかける、鉦をならすなど雨乞いとして行われた頃の諸要素が抜けた一方で、入魂が復活し、また村内を巡行するときだけでなく運動公園のグラウンドでも龍を担ぐのは、それが神輿担ぎに似ていて「祭り」のイメージに沿ったものだからだと考える。

他に、祭りの賑わいをポジティブに描くものとして、『清川村 30 周年記念要覧 清川風土記』のやまびこまつりについての記述がある。

昨年(1988)の十月二十七日、恒例の「やまびこまつり」が盛大に開かれました。「交通安全村民総ぐるみ大会」をはじめ、各種の模擬店や芸能まつりなど多彩な催しものが行われ、ふれあいの輪が一段と広がりました。ワタ菓子や金魚すくいなどの店の前にたかる子どもたち。ワァッと歓声のあがるのはこどもたちのもちつき大会。庁舎全体を会場に、1000人が参加。この村に新しく移り住んだ人と、昔から住んでいる人の交流の輪も広がります。手づくり味噌コーナーでは主婦たちが、「パーと売れてしまった」と、もうニッコニコ。村と各種団体が共催して開く「やまびこまつり」は、まさに村の人びとの連帯感を培うためになくてはならぬものになりました。「村の発展のために、地域住民の連帯感を核としたふるさとづくりの1つとして、これからもどしどしこうした企画がほしい」。こんな声が住民の間から期せずして起こっていきました。〔清川村総務課 1988b : 9〕

ここでは、「1000人」という数字とともに、「ふれあいの輪が広がる」ことや「連帯感」が強調されている。こうしたことから、祭りの「賑わい」と「連帯感」が、祭りに期待されていたと読み取れる。このように、「祭り」にある「賑わい」のイメージが多くの人に見せよう／参加させようとする意図

と結びついたため、〈祭り化〉されたと考える。

青龍祭では、多くの要素が「祭り」のイメージに合ったものであると同時に、多くの人に参加を促す契機となっている。たとえば、雨乞いが時代に合わないから、「祈願札」へ変更したことについては、「祈願」が祭りのイメージに合うとともに、時代に即した「祈願」を創り出すことで多くの人が参加できるようにする狙いがあったのではないか。先述した神輿担ぎも、来場者は誰でも担いでいいということを考えれば、多くの来場者に参加する場を与えるものにもなっている。また、柳田の『日本の祭』の中で提灯について記述がある。提灯に使われている技術や素材を考えれば古くまで遡れるものではなく、人から見られることを意識するなかで生まれたものだとする文脈のだが、「提灯」には当時「祭りといえば提灯」というイメージがあったことを記している〔柳田 1998 (1942) : 30-31〕。提灯が祭りのイメージに合ったものだとすれば、それが青龍祭に飾られるのも〈祭り化〉によるものと考えられるが、同時に提灯作りは小学後低学年が青龍祭に参加する機会を与えている。また、「芸能発表」についても、その前段階と推定される形式が青龍祭の本番前日に行われる盆踊りであり、八幡神社でも同様に本祭前日に盆踊りが行われてたことや、かつては八幡神社の祭りで義太夫が行われていたという記述からも、「祭り」のイメージに合ったものだと考えられる。

このように、青龍祭は「祭り」のイメージに合った要素を活して多くの人に参加を促している。多くの人に見せよう／参加させようという意図に即しつつ、〈祭り化〉していった結果、青龍祭は今ある形になったといえよう。

おわりに

本稿では、青龍祭という雨乞いを復活させた事例について、復活させた意図と背景を探った。雨乞い龍を復活させ青龍祭を開催し、現在にいたる背景には、昔の文化や生活を学ぼう／伝えようとする動きと、多くの人に見せよう／参加させようという動きがあった。前者を強める要因として、ダム建設によって宮ヶ瀬で伝えられてきた価値ある生活・文化・自然が失われてしま

うという危機感があった。また、後者は清川村を観光地化しようという動きが後押しした。「多くの人に見せよう／参加させよう」という意図によって、龍の製作は青龍祭になり、〈祭り化〉した。「祭り」は賑わっているものというイメージがあるため、多くの人に見せよう／参加させようという意図と〈祭り化〉は親和性が高かった。

雨乞いの龍を復活させ、青龍祭にするというプロセスについて考察することで、地域の歴史と雨乞い行事を取り巻く意図など、様々な物事とその影響関係を明らかにした。

注

- 1) 神奈川県「人口と世帯」https://view.officeapps.live.com/op/view.aspx?src=https%3A%2F%2Fwww.pref.kanagawa.jp%2Fdocuments%2F12041%2Fjinkotosetai_r7_9.xlsx&wdOrigin=BROWSELINK (2025年10月10日最終閲覧)
- 2) 清川村 2024年3月21日「村への交通アクセス」<https://www.town.kiyokawa.kanagawa.jp/soshiki/sangyokanko/koutu/276.html> (2025年11月06日最終閲覧)
- 3) 同上
- 4) 清川村 2025年7月17日「第39回 青龍祭について」<https://www.town.kiyokawa.kanagawa.jp/soshiki/kyoikuinkai/syakaikyoiku/seiryuusai/3828.html> (2025年09月11日最終閲覧日)
- 5) 同上
- 6) 同上
- 7) 青龍祭実行委員会と青龍保存会の違いの説明は、青龍保存会に所属している複数名から聞いた。
- 8) 青龍祭実行委員会についての記述にあたっては、2023年7月31日に清川村生涯学習課から頂いたメールと、そのメールに添付されていた青龍祭実行委員会の名簿を参照した。
- 9) 清川村生涯学習課から頂いたメールによると、入魂式にあたって厚木市飯山で活動している宮司を呼んでいる。
- 10) 1986年の記録なので、「昨年」は1985年を指すと推定される。
- 11) ここでは「やまびこ」がひらがなで表記されているが、該当すると推定される書籍の表紙には『山彦古話』と漢字で表記されている。
- 12) 原文では氏名が載っているが、個人名につき匿名化した。
- 13) 清川村 2023年3月23日「清川村マスコットキャラクター『きよりゆん』」<https://www.>

town.kiyokawa.kanagawa.jp/soshiki/sangyokanko/topic/1664.html (2025年10月8日最終閲覧)

- 14) 清川村 2025年5月30日「KIYOKAWA CHABACCO (きよかわちゃぼこ) 新パッケージを販売」<https://www.town.kiyokawa.kanagawa.jp/soshiki/kennou/nourin/nouti/2581.html> (2025年10月10日最終閲覧)
- 15) 清川村 2023年3月23日「清川村マスコットキャラクター『きよりゆん』」<https://www.town.kiyokawa.kanagawa.jp/soshiki/sangyokanko/topic/1664.html> (2025年10月8日最終閲覧)
- 16) 文化庁「平成29年度文化遺産総合活用推進事業(地域文化遺産活性化事業)交付決定一覧」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki_kasseika/h29_sogokatsuyo/pdf/h29_chiiki_ichiran.pdf (2025年10月17日最終閲覧)
- 17) 文化庁「平成29年度文化遺産総合活用推進事業について」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki_kasseika/h29_sogokatsuyo/index.html (2025年10月17日最終閲覧)
- 18) 清川村教育委員会事務局「第3次清川村総合計画に基づく青龍祭」https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/joseishien/chiiki_kasseika/h29_sogokatsuyo/jisshikeikaku_chiiki/pdf/r1403297_07.pdf (2025年10月17日最終閲覧)
- 19) 同上

参考文献

阿南透

2018「高度経済成長期における都市祭礼の衰退と復活」『国立歴史民俗博物館研究報告』207

石川為蔵

1981「雨ごい」『山彦古話』清川村役場

大川智子

1981「発刊によせて」『山彦古話』清川村役場

小川直之

1988「山の仕事と農耕」神奈川県立博物館編『県北部の民俗2 愛甲郡清川村』(神奈川県民俗調査報告16)神奈川県

長田平

1988「年中行事」神奈川県立博物館編『県北部の民俗2 愛甲郡清川村』(神奈川県民俗調査報告16)神奈川県

落合清春

1997「あとがき」ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会編『ふるさと宮ヶ瀬：浜谷の村から』夢工房

落合茂

1981「発刊によせて」『山彦古話』清川村役場

神奈川新聞編集局

2001『宮ヶ瀬ダム—湖底に沈んだ望郷の記録』神奈川新聞社

神奈川県統計センター編

2025『神奈川県年齢別人口統計調査結果報告—令和7年1月1日現在』神奈川県株式会社ばど編『神奈川県でたったひとつの村』清川村役場

川邊絢一郎

2019『「復活」する行事：男鹿市泉台のナマハゲ』『西郊民俗』247

国土地理院

—「地形図 vector」<https://maps.gsi.go.jp/vector/#14.7/35.478381/139.282414/&ls=vstd&disp=1&d=1> (2025年11月17日閲覧)

国土地理院

—「地形図 vector」<https://maps.gsi.go.jp/vector/#14.033/35.476703/139.287797/&ls=vpale&disp=1&d=1> (2025年11月17日閲覧)

清川村教育委員会・清川村文化保護委員会編

1972『社寺めぐり』清川村教育委員会

清川村教育委員会・清川村文化保護委員会編

1987『清川の伝承』清川村教育委員会

清川村小学校社会化副読本編集委員会

1991『みんなの清川』（第4版）清川村教育委員会

清川村小学校社会化副読本編集委員会

2022『みんなの清川』（第11版）清川村教育委員会

清川村総務課

1979「八幡神社—煤ヶ谷地区」『広報清川』29

清川村総務課

1980「老人生きがい対策事業 『山彦古話』原わら募集」『広報清川』41

清川村総務課

1987「第2回 青龍祭」『広報きよかわ』126

清川村総務課

1988a『村勢要覧資料編—昭和63年度』清川村

清川村総務課

1988b「ふれあいのページ 青龍祭」『広報きよかわ』138

清川村総務課

- 1989 「ふれあいのページー青龍祭」『広報きよかわ』150
清川村総務課
- 1993 「町の話題ー青龍祭」『広報きよかわ』198
清川村総務課
- 1994 「町の話題ー青龍祭」『広報きよかわ』221
青龍祭実行委員会
- 2025 『青龍祭パンフレット』
高谷重夫
- 1982 『雨乞習俗の研究』法政大学出版
竹内武
- 1972 「煤ヶ谷村の狩猟・雨乞など」『民俗』13
樋口雄一
- 2018 「現代」清川村教育委員会編『清川村史』（通史編）清川村
ふるさと宮ヶ瀬を語り継ぐ会編
- 1997 『ふるさと宮ヶ瀬：溪谷の村から』夢工房
八木康幸
- 1999 「地理学と民俗学：境界領域の2つの主題」（関西学院大学博士論文）
柳田国男
- 1990 「日本の祭」『柳田国男全集』13 筑摩書房（初出：1942 『日本の祭り』弘文堂）
山本質素
- 1988 「村制と族制」神奈川県立博物館編『県北部の民俗2 愛甲郡清川村』（神奈川県民俗調査報告16）神奈川県
山本務本
- 1981 「発刊によせて」『山彦古話』清川村役場